



学生YMCAハンセン病療養所訪問プログラム50年史の研究 : 若者のボランティア行動がひらくライフストーリー

著者	岩坂 二規
雑誌名	関西学院大学人権研究
号	24
ページ	1-21
発行年	2020-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028815

<論文>

学生 YMCA ハンセン病療養所訪問プログラム 50 年史の研究 — 若者のボランティア行動がひらくライフストーリー —

A study of the 50 years history of the Student YMCA visit program to Hansen's Disease Sanatorium : Life stories from the volunteer work of the youth

岩 坂 二 規

Abstract

In the 2015 "Research Notes", I suggested research topics of 50 years history of youth visits to Hansen's disease sanatorium. The results of the joint research conducted after that were reported and examined based on the contents of "Michi; 50 years of 'Oshima-work'," the commemorative textbook. Based on the results, I discussed the effects and significance of youth social volunteering to create a society where human rights are protected. There, the perspective of future research by the Life-Story Research was clarified by focusing on the power of the Story created by working together with the marginalized beings in modern society and on the spirituality that would lead the Story.

はじめに

2015 年の本誌「研究ノート」において、1960 年代から学生 YMCA によって継続された国立ハンセン病療養所への訪問プログラムを手掛かりに、日本の近代化における最大の人権問題の一つであるハンセン病問題の「文化的・社会的位相」における学生、卒業生のボランティア行動の意義を検証する研究の可能性を探った¹。本稿では、その中で提起した検証視点と研究課題に基づい

て、その後取り組まれた共同研究の成果を提示し、社会の近代化の中で周縁化された人々とフィールドにつながる活動の教育的な意味について、また、それが人権が守られる社会づくりのために果たす役割について、その効果と可能性を問い直したい。

現在に至るまで、ハンセン病問題に限らず、社会の近代化に伴う人権抑圧によって形づくられた社会課題の現場に向けて、研究調査や報道のみならず、それらに触発された学生や市民のボランティアな行動原理に基づく様々な支援活動（社会的

1 岩坂二規（2015）「人権研究におけるボランティア行動の意義と評価 — 学生 YMCA によるハンセン病療養所訪問プログラムをもとに —」『関西学院大学 人権研究』第 19 号

なボランティア行動)が、国内外を問わず行われてきた。21世紀に入ってから、課題探究型の学びやアクティブラーニングといった新しい学力観が提示され、学校教育の分野においてもそのような社会問題や地域社会のフィールドにおいて体験的な学びを行うことが重視されるようになっていく。

新しい学力観では、そのような社会の課題に出会うことのみでなく、その問題解決に向けた能力の育成が謳われており、そこでは具体的な解決に向けた社会行動や支援活動、つまり従来の社会的なボランティア行動そのもの、またはそれに発展する可能性を含む行動体験が重視されることだろう。本研究は、半世紀にわたって学生を主体とする若者がハンセン病問題という社会課題のフィールドに関わり、課題解決のための行動を続けた実態を明らかにしようとするものである。社会的なボランティア行動における課題解決とは、誰の何のためのものか、また活動を教育的な活動と捉えた場合、その評価や教育的効果をどのように測り提示できるのか、といった問いへの明確な答えや標準化された手法は確立されていない。本研究は、そのような現代の教育観と教育実践・評価についても、示唆性を有するものであろう。

1. 問題の背景と研究の目的

本研究は、従来の「ハンセン病学」「ハンセン病史」の研究に比して、教育的視点と人権教育の可能性に主眼を置いたものであり、幅広い年齢層を含む多くの「卒業生」の経験を調査対象とすることから、社会的ボランティア行動の研究の視点に立つものと考えられた。膨大なハンセン病問題に関する歴史と証言、また日本のハンセン病問題の制度的解決の一里塚ともいえる2001年の「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」に前後して社会学他で取り組まれた諸研究を基本資料としつつ、西尾雄志(2014)『ハンセン病の「脱」神話化』、蘭由岐子(2004)『「病いの経験」を聞き取る』といっ

た本研究の視点に近い研究内容を土台にし、先行して行った調査研究(前掲、2015)をその枠組みとした。共同研究メンバーは、幅広い専門性と当事者性で構成され、いずれも直接的な社会的ボランティア体験に根差した知恵とスキルを持ち合わせており、当事者視点の市民研究のあり方が研究をより良いものに深めることが期待された。

本研究は、国立療養所「大島青松園」でのワークキャンプと訪問交流の歴史を、残存・散逸している資料を収集することで可能なかぎり明らかにして、1960年代以降の年表を作成するとともに、過去のプログラム参加者による当時の経験のふりかえりを文集の形で編纂すること、さらにその中から本研究に示唆性を有すると考えられる証言者を抽出し、聴き取り調査を実施することを計画した。それにより、若者のボランティア行動による社会問題へのアプローチの、人権または人間性の回復に向かうための教育的な意義と効果について、分析的かつ対話的な研究によって明らかにし、得られた成果を文集の刊行と公開研究会開催による知的交流を通して、広く共有することを目的とした。

2. 共同研究による調査の概要

(1) 共同研究に至る経緯

本研究への取組みの直接的な動機は、学生YMCAで1965年から半世紀にわたって継続された国立ハンセン病療養所大島青松園への訪問プログラムに参加した経験をもつ卒業生による提起と、同プログラムへの研究的関心による。同訪問プログラムは、神戸大学、聖和女子大学(当時)などを中心に学生YMCA神戸連盟(当時)によって「大島青松園ワークキャンプ」として開始され、主催者や実施形態を変遷させながら50年間続き、関西学院大学聖和キャンパス学生YMCAによる「大島青松園訪問プログラム2014」によって終了した²。筆者は2001年から聖和大学(当時)、その後合併した関西学院大学の聖和キャンパス学生

YMCA の顧問を務めていたことから、50 年間の同活動の歴史を記録に留める必要を感じるとともに、このような若者によるボランティア行動のもつ社会的文化的な意味合い、また人権教育の観点からの教育的効果といったことを考え、前掲「研究ノート」にまとめた。その頃、かつて同プログラムに参加し、その後も個人的に大島青松園を訪れていた聖和大学卒業生が、長年継続したプログラムの終了を知り、同じく大島を訪れた各年代の卒業生が当時どのような活動をし、その経験がどのようにその後の人生に反映したか、またそのことが療養所の入所者にとってどのような意味をもったかを問い直したいという思いに駆られた。拙稿「研究ノート」を読んだ彼女からの提案を受け、他の同プログラム元参加者である卒業生に呼びかけて、研究視点に立ってこの活動の意味を探究するためのプロジェクトが企画された。

呼びかけに応じて、2016 年 2 月に 1 回目の企画準備の会がもたれ、①過去のプログラム参加者が会する同窓会の開催、②有志による大島訪問、③50 周年記念誌刊行の可能性の検討 の方針が示された。同年 7 月に「超世代・大島同窓会」と銘打って 51 名のかつての参加者が関西学院聖和キャンパスに集まり、記念の礼拝と世代を超えた交流の時がもたれた。(写真 1) その中で同年 9 月に実施する「超世代・大島訪問」への参加と、記念誌『大島訪問の 50 年記念文集 (仮称)』編集のための寄稿の依頼が行われた。9 月 11 日の大島訪問には 34 名が参加し、霊交会礼拝堂におい



写真 1 超世代大島同窓会 (2016.7.30)



写真 2 超世代大島訪問 (2016.9.11)

て記念の礼拝がもたれ、「超世代・大島同窓会」のふりかえりと青松園自治会副会長による講演、家庭訪問などを行った。(写真 2) これらの「超世代企画」の開催に際しては、その目的が過去の懐かしさや旧交温めるだけのものではなく、社会的文化的また教育的な研究視点を今と未来に向けて、ハンセン病問題に学びハンセン病患者³と関わ

-
- 2 当初からこのプログラムの実施先の受入れを担った大島キリスト教霊交会（以下、霊交会）が教会としての対外的活動を中止し、入所者信徒による運営を同年 11 月に終了、解散を宣言したことにより、学生 YMCA のプログラムの終了を決定した。長年続けられた霊交会との公式のプログラムではなくなったが、その後も 2009 年に聖和大学と法人合併した関西学院大学学生 YMCA によって、大島訪問活動は継続されている。
- 3 本稿では、ハンセン病療養所入園者を「ハンセン病患者」と表記している。報道等では「ハンセン病元患者」「ハンセン病回復者」といった表現が用いられることが一般的ではあるが、ここでは後述する医療人類学の分野で提起される「病者」の定義のあり方に拠る。このことを蘭 (2014) は次のように説明している。「…ハンセン病は、『疾患』としてのハンセン病が治ったあとも、わずらった人の人生に非常に大きな影響を与えてきた。そこで、『疾患』をわずらう『患者』に対応させて、わずらうことの経験である『病い』をわずらう人という意味で彼らを『病者』と呼ぶにふさわしいと判断して使用している。」

り交流した卒業生たちによる、当事者研究の視点で行われるものであることが意識された。記念誌編集の原稿募集の案内文に示された「目的」と「編集方針」には、そのような意図が現れている：

<目的>

- ①かつて大島でどんな交流がどんな形で行われ、私たちに何を残してくれたのか、互いに分ち合う。
- ②大島に生きた／大島に生きる方々の思いに少しでも寄り添い、受け継いだものを形にしてのこす。
- ③長年引き継がれた大島プログラムが語りかけるメッセージを過去のものにせず、その学びと意味をこれからの世代に手渡す。

<編集方針>

- ・単なる思い出集ではなく、大島に関わったことがそれぞれの人生にどのような意味を持つか、という視点を大切にする。
- ・原稿の内容は、①大島訪問当時の状況や体験（歴史の証言）②大島での経験が自分の人生に与えた影響や意味（ライフ・ヒストリー）という2つの側面を意識する。
- ・文集の内容を材料として、さらに学Y大島訪問プログラムの歴史的社会的な意義について分析・研究する作業は別の（次の）段階の取組みとする。⁴

2016年2月に最初に集まった準備会のメンバーが発起人となって一連の「超世代企画」の事務と運営を担い、それぞれの企画についてその意味と目的を共有しながら進められた。その後、発起人メンバーで50周年記念誌の編集委員会を構成し、定例的にミーティングを重ねながら、記念誌編集の方針や研究方法の検討を行った。いざ文集の原稿を募集すると、社会の現場で多忙な中にあ

る卒業生からの寄稿が思うように集まらず、2017年度中をかけて原稿を継続募集しながら、資料収集や聴き取り調査などを並行して行うことになった。2017年10月には、第1回大島青松園ワークキャンプ（1965年）の引率・実施責任者であり、このプログラムの「生みの親」ともいえる播磨醇牧師の自宅を訪ね、ワークキャンプ開始当時の状況などについて聴き取りを行った。同年11月には、「超世代大島懇談会」として「第3回大島青松園ワークキャンプ」（1967年）の参加者から当時のプログラムの内容と時代状況などを聴き、初期の参加者と1980年代以降の参加者（発起人メンバー）の在学時の体験とその後の捉え方の共通点と相違点などについて話し合った。

このように、大島訪問プログラムの50年を機にその「意味」を確認し探究しようとした「発起人」そして記念誌の「編集委員」となったメンバーは、「超世代企画」の運営を通じて、さまざまなプログラム参加当時の療養所の様子や時代状況などの歴史的証言と、卒業後の参加者自身のライフ・ヒストリーに出会うことになった。その「意味」が、前掲「研究ノート」で提示したような「若者のボランティア行動がこの社会の人権文化の醸成にどのように寄与するか」といった問いに応えるものかどうか、その時点で定かではなかった。しかしながら、50年分の名簿や連絡先が十分に残されていない中で個人情報保護の壁に阻まれながら、繋がり糸を手繰るように「超世代企画」と50周年記念誌製作の意味と目的を伝え、参加を呼びかけたのは、メンバー自身がかつての学生参加者であり、ハンセン病問題との、そして大島入園者との出会いとその後の関係性がそれぞれの人生を形作ったことを自覚したからであっただろう。学生時の参加者ではなく2001年からの引率顧問としての立場である筆者も含めて、こうした自らの

4 「学生YMCA 超世代・大島同窓会 プログラム」（2016年7月30日）p.8、および「学生YMCA 超世代・大島訪問プログラム プログラム」（2016年9月11日）p.8

ハンセン病問題またハンセン病患者との出会いを原体験とする背景を土台にしたメンバーは、ハンセン病療養所への訪問プログラムという社会的ボランティア行動の当事者である。それ自体をリサーチの対象とする本研究は、「当事者性に基づく研究」として取り組まれることが重要と考えられた。そこで、調査内容を集合させる50周年記念誌製作とその成果の研究活動のために、編集委員有志による共同研究会を立ち上げ、公的な共同研究助成を受けて研究を進めることが計画された⁵。その結果、2018年度「関西学院大学人権教育研究室公募研究（人権が守られる社会づくりのための大学からの発信に資する研究）」に採択され、年度中8回の定例研究会と1回の公開研究会、また大島青松園入園者を含む関係者への3回の聴き取り調査を実施した。その成果は50周年記念誌『道一「大島ワーク」⁶の50年』に集約され、2019年3月の刊行となった。

(2) 調査の概要

①研究調査の工程

以下は、2018年度中1～2か月に1度の定例研究会を軸に行った研究調査の工程の概要である。

大島訪問プログラムに関する資（史）料の収集、記念誌原稿の収集とデータ化（～7月）、年表の作成（～12月）、聴き取り調査の実施とデータ化

（6月～11月）、調査結果分析（9月～12月）、年表の作成・完成（～12月）、記念誌編集会議、研究成果報告会準備、調査結果分析のとりまとめ（10月～1月）、記念誌校正・印刷（12月～2月）、記念誌刊行と研究成果報告会（公開研究会）の開催（3月）

②研究調査の内容

歴代の大島訪問プログラムでは、訪問終了後の当該年度内に報告文集が作成されていた。2000年代以降の報告文集のほとんどは現学生YMCAで保管されているが、それ以前のものは散逸し存在が確認されていないものも多かった。今回の調査で、それらを卒業生他から可能な限り収集した。それらをもとに、訪問交流プログラムの基本的なパターンや年代ごとの特徴を整理し50年史の年表を作成した。また、資料提供者を中心に連絡のつく卒業生や関係者に直接聴き取りを行い、年度ごとの報告文集だけではわからない当時の様子やプログラムの詳細について確認するとともに、先行調査では不明だったプログラム発足当時の時代背景と参加動機との関連性、また学生YMCA以外の若者による大島訪問交流のルーツについて事情を知る人物を手繰り、聴き取りを行った。さらに、2016年から開始していた記念誌製作のための過去のプログラム参加者の寄稿を30人以上を目標に継続収集し、同時に卒業生や関係者に写真資料の提供を呼びかけた。定例研究会での検討と

-
- 5 共同研究会の構成は次のとおりである（2018年度当時。「卒業生」はすべて聖和大学または聖和女子大学の卒業生）。赤松真希（関西学院大学神学研究科大学院生）、岩坂二規（代表者）、津村樹理（卒業生、奈良女子大学附属幼稚園教諭）、飛田雄一（関西学院大学非常勤講師、神戸学生青年センター館長、神戸大学学生YMCA事務局）、前田ゆたか（卒業生、「超世代企画」発起人代表）、桃山龍太（卒業生、社会福祉法人「みかり会」介護職員）。飛田は大島訪問プログラムへの参加経験はないが、1960年代から1970年代にかけて運営の中心になった神戸大学学生YMCA（現在は活動休止中）の事務局を務めており、共同研究メンバーとして、当時の神戸大学学生YMCAや関西の学生運動の状況などについての知見と、保存されている関係資料の収集に際して多大な協力を提供した。
- 6 「大島ワーク」という呼称は、50年の間に「大島ワークキャンプ」「大島青松園訪問」「大島訪問プログラム」など、年代ごとに変化したもののうち、初期の参加者がよく使用するものである。本稿では、それらを総称して基本的には「大島訪問プログラム」と表記しているが、「大島ワーク」を原点回帰的な、あるいは象徴的な名称として用いる場合もある。

報告を軸に、これらの調査活動によって得られた成果を記念誌編集作業に集約させ、その研究年度内の刊行と、刊行後に合わせた公開研究会の開催によって研究成果を広く還元し、大島訪問プログラムの社会的意義について参加者と共に考える機会を提供した。

3. 共同研究による調査の成果

ここでは、共同研究による調査結果の集約といえる学生 YMCA 大島訪問プログラム 50 年記念誌『道—「大島ワーク」の 50 年—』（以下、『道』）からその成果を明らかにしたい。『道』を構成する「Ⅰ部 前史」「Ⅱ部 若者たちの軌跡」「Ⅲ部 交わりの証し」「Ⅳ部 『大島ワーク』後を生きて」について、本研究のテーマと問いの土台となる 50 年史の記録作成という側面から、また、若者のボランティアな行動と経験がそれぞれの人生に与えた影響や意味（ライフストーリー研究）という側面から、社会的ボランティア行動の意義と評価を探るための手掛かりを得たい。以下、「報告文集と年表」と「語りと証言」の要素に分けて、調査の結果を提示する。

(1) 報告文集と年表

①一次資料としての報告文集

本研究の重要な一次資料である、大島訪問プログラム実施年度ごとに作成された報告文集の所在が未確認であったもののうち、34 部を収集することができた。また、プログラムが実施されたことは確認できたが文集の所在が不明の年度が 10 回、プログラムは実施されたが文集を発行していない年度が 4 回、プログラムが大島の水不足によ

り中止となった年度が 2 回、プログラムが実施されたかどうか定かではない年度が 1 回であった⁷。

報告文集は、年度によって大きさやレイアウト、構成などは異なるが、概ね内容が共通している部分が多い。開催要項に関する基本情報、プログラム内容の報告、ハンセン病／ハンセン病問題に関する資料、参加者の感想などである。プログラム内容として共通しているものは、ハンセン病についての理解や青松園の歴史に関する学習の要素（園長、職員、入園者などによる講演・講義、島内フィールドワーク）、ワーク（道路建設などの土木作業、施設補修、清掃・整理）、家庭訪問（霊交会信徒、自治会役員、その他の入園者との交流）、交流イベント（夏祭りへの参加、夕涼み会や花火会）などである。参加者や主催者メンバーが分担し、講演内容や交流時の記録をもとに報告されており、パソコンによる編集作業が可能になった年代以降は、プログラムの様子の写真も豊富に掲載されている。ハンセン病とハンセン病問題に関する資料としては、事前の準備会や学び会で使用したハンセン病問題の歴史年表や用語解説、講演をもとにした医学的な解説文などが掲載されているものが多い。参加者の感想文は、プログラム内容についての率直な感想のほかに、入園者との交流を通じて得られたハンセン病患者やハンセン病問題に関する認識の変化、また、個人的な悩みや葛藤を掘り下げるものや自らの信仰のあり方を問い直すような内面的な省察も多く見られた。いずれも、概ね 10 代後半から 20 代前半までの瑞々しい感性と、荒くとも鋭い観察力が感じられる記述に溢れている。

確認できた 34 部の報告文集や調査に付随して見つかったノート、手記、手紙、写真などの資料

7 現存する報告文集の調査は、過去の参加者への聴き取りの際に寄贈を受けたり、「超世代企画」を通じて呼びかけたりして収集した。合計が 50 回を超えるのは、②の表のとおり 1 年度に 2 回プログラムを実施したケースが 3 回あるためである。

からは、大島訪問プログラムが、大学生による社会問題へのボランティア行動という共通した要素とともに、それらが時代や世相、運営を取り巻く状況などの環境要因によって、プログラム内容の特徴や参加者の関心、入園者との関係性の持ち方や継続性、体験したことへの省察の特徴など、多様であることも明らかになった。

今回収集できた報告文集および関連する資料をもとに、50年史年表を作成することによってこの活動を記録として残すとともに、大島訪問プログラムの全体像を俯瞰することによって本研究の分析に資するものとなった(②の表を参照)。

②年表

『道』には、「大島ワークキャンプ・大島青松園訪問プログラムのあゆみ」として、巻頭4頁にわたって年表が掲載されている。年表は「第1回大島青松園ワークキャンプ」が開催された1965年から始まり、訪問受入れ側の霊交会が対外的な活動を終了することを機に最終回と位置づけて実施された第51回目となる「大島青松園訪問プログラム2014」までを区切りとし、その後2016年に「超世代企画」で実施した訪問と、2018年に関西学院大学聖和キャンパス学生YMCAがプログラムの復活を目指して試行的に実施した「関西地区学Y夏期スタディツアー」も加えている。『道』は、1965年から2014年までのプログラムを“「大島ワーク」の50年”と捉えているが、下表に記載のとおり50年の中で水不足による受入れ側の事情で一度も実施できなかった年度が2回(1981, 1983)、報告文集や資料がなく事情は明らかではないが実施が確認できない年度が1回(1975)ある。また、訪問時期を分けて2回プログラムを実施した年度が3回ある(1980, 1995, 1996,)。これらは、水不足の激しい夏休みが受入れ側の負担になることを考慮して、時期を夏と秋に分けたり、

ワークを中心とする訪問と交流を中心とする訪問を分けて企画したりしたことによること⁸が、当時の報告文集をもとに記されている。項目作成について編集会議で検討した結果、大島訪問プログラムを構造的に理解する助けとなるよう、基本的な情報(年度、実施日、参加人数、所属団体、プログラムの概要、報告文集の有無)とともに、関わった指導者(引率/顧問、チャプレン/礼拝説教者)と学生のリーダーシップ(リーダー/実行委員長)、受入れ側の代表者名(霊交会代表)、ハンセン病問題についての学びとして設定された講演(講演者名)の各欄を設けることにした。

(2) 語りと証言(ライフストーリー)

『道』は全編(I部～IV部)にわたって、大島訪問プログラムに関わった人たちの「語り」と「証言」に満ちていると言っていい。ハンセン病問題に関する多くの研究文献とともに、今回の調査で明らかになった関係者の残した資料や報告文集、それらをもとに作成した50年史年表などは、大島訪問プログラムをめぐるライフストーリーを立体的に立ち上がらせるための枠組みとも考えることができる。これに関して、筆者は『道』の読み方として、「…『大島ワーク』の前史に関わる証言と交わりの証の言葉から読み取ることのできるメッセージを理解のフレームワークにして、写真、年表、そして9篇のコラムを縦軸に、また過去の年度ごとの文集から再掲した参加者エッセイと、本誌のために書き下ろされた寄稿を横軸に据えたとき、…『大島ワークの50年』をボランティアで共働的な人間性回復のためのストーリーとして、立体的に読み始めることができるのではないだろうか」⁸と述べた。そこには、『道』に著された「語り」と「証言」それ自体に、文化的・社会的な人権抑圧と差別の構造化に対して、ボラン

8 岩坂二規「あとがきに代えて―『大島』という物語を生きるわたしたち―」『道』p.97

表:「学生 YMCA 大島訪問プログラム年表」(※『道一「大島ワーク」の50年一』pp.3-6の年表に一部加筆修正して転載)

年度	実施日	引率/ 参加顧問	チャプレン 礼拝説教者	学生リーダー/ 実行委員長	参加人数	主催	所属団体	霊交会代表	講演	概要	文集有無
1965			播磨 醇	植野昭 (神)		神戸学 Y 連				盲人会館より眉山亭までの道が作られる。(盲人会 50 年史より)	
1966			播磨 醇	平田秀 (神)		神戸学 Y 連					
1967	7/24 (月) ～ 7/30 (日)		播磨 醇 (責任者) 西垣二一	岩島靖 (神)	20名	神戸学 Y 連	関西学院大学 神戸大学 大阪大学 聖和女子大学 頤栄短期大学			道路修理を行い、新道路が完成、資材費は 6 万円が関西 MTL から援助があった。霊交会の配慮で「森繁の島」(俳優の森繁久彌が所有していた小島)に船を貸してもらって連れて行ってもらい、海水浴などを楽しんだ。	○
1968	7/30 (火) ～ 8/4 (日)		播磨 醇	後藤憲一 (神)	19名		聖和女子大学 神戸大学 頤栄短期大学 松陰女子短期大学	角川 一行		ワーク作業として、花壇作り、道路整備を行う。台風 4 号の影響で 8/1 からのワーク作業となり、台風の後始末も含まれる。資材費は 4 万円が関西 MTL から援助があった。	○
1969	8/5 (火) ～ 8/11 (月)		西垣二一	渡辺久晃 (神)	24名	神戸学 Y 連	聖和女子大学 神戸大学 神戸女学院大学 頤栄短期大学 同志社大学	角川 一行		初めて、病棟診察見学を行う。大原先生(女性・整形外科)と入所者との関わりが魅力的であった。「野島園長が亡くなられたが、自分たちが大島ワークキャンプができたのは野島園長のおかげ」(西垣二一先生の文集より)いもづる会、京都世光教会と合同で道路改修工事を行う。(『閉ざされた島の昭和史』より)	○
1970	8/19 (木) ～ 8/24 (日)		佐藤与紀 播磨 醇 橋本滋男	後藤憲一 (神)	32名		聖和女子大学 神戸大学 頤栄短期大学 松陰短期大学	角川 一行		ワーク作業として、道路整備、園内清掃、台風の後片付けを行った。日ノ本学園高等部の生徒が 2 名参加。東神戸教会員 3 名が参加。	○
1971	7/31 (土) ～ 8/6 (金)		佐藤与紀 播磨 醇	岡本隆 (神)	25名	神戸学 Y 連	聖和女子大学 神戸大学 頤栄短期大学 松陰短期大学 甲南大学	角川 一行		ワーク作業として、道路整備(溝掃除など)、園内清掃(草刈りなど)。病棟訪問を行った。現役の聖和の学生は参加しておらず、卒業生が参加し、繋げていた。	○
1972	8/7 (月) ～ 8/13 (日)		佐藤与紀	中山和夫 圓尾和雄 (神)	18名	神戸学 Y 連	聖和女子大学 神戸大学 頤栄短期大学 神戸外国語大学 松陰女子大学			各団体との懇談会を行う。(8 日:自治会「生きがい論・経験」、10 日:霊交会、11 日:職員)ワーク作業として、不自由者センターの大掃除を行った。	○
1973			佐藤与紀	高岡道雄 (神)	13名						
1974	8/9 (金) ～ 8/14 (木)		佐藤与紀	沼井孝次 (神)	14名	神戸学 Y 連	神戸大学 頤栄宗教部			ワーク作業として、不自由者棟新センターの掃除、病棟の網戸サッシの掃除を行った。自治会・盲人会・霊交会・洗足会(クリスチャンの職員の集まり)・園長との懇談会が行われた。	資料あり 『想影』10 号
1975											
1976			佐藤与紀	藤井徹 (神)							
1977	7/15 (金) ～ 7/20 (木)		佐藤与紀	相原秀樹 (神)	11名	神大 Y	神戸大学			家庭訪問。向こう島へボートに乗せてもらって泳ぐ。ワーク作業としてペンキ塗りを行った。	○

年度	実施日	引率 / 参加顧問	チャプレン 礼拝説教者	学生リーダー / 実行委員長	参加人数	主催	所属団体	霊交会代表	講演	概要	文集有無
1978	8/5 (土) ～ 8/10 (木)		佐藤与紀 西垣二一	井澤秀記 (神)	8名	神大 Y	神戸大学 聖和女子大学			離れ島にモーターボートで連れて行ってもらい、海水浴をする。	○
1979	8/8 (水) ～ 8/12 (日)		佐藤与紀 西垣二一	深田秀樹 (神) 澤田美智子 (聖)		神大 Y 聖和女子 Y	聖和女子大学 立命館大学 神戸大学 大阪大学 京都大学 関西学院大学			ワーク作業として、盲導欄のペンキ落としを行う。家庭訪問。所属団体以外で、看護師、薬剤師、看護学校学生などが参加した (すべて相川さんの紹介)	○
1980			佐藤与紀 西垣二一	藤岡羊子 (聖)	26名	関西学 Y 連	神戸大学 聖和女子大学 京都大学 大阪大学 関西学院大学 日本福祉大学 慶応大学			ワーク作業として、初日は土方をしたが、雨天のため予定の変更が多く、入所者使用の施設の網戸洗いのみ行った。中止になったワークの時間は自治会からの要請で家庭訪問に変更した。体調不良者が2名出て、青松園の副園長の診察を受ける。霊交会以外の入所者で大久保義則さん、竹内義光さんと交流できた。	
		西垣二一			9名					2泊3日で実施。霊交会礼拝。	
1981										水不足のため、中止	
1982	9/1 (水) ～ 9/5 (日)		西垣二一 飯野敏明	川田靖之 (神) 中村祐子 (聖)	11名	関西学 Y 連	神戸大学 聖和大学			7月と9月にワーク日程を分けて実施する予定だったが、7月のワークは水不足で中止。盲人会の人たちとの懇談、園長の話、自治会との懇談、病室訪問、海岸・池の清掃、草刈り、家庭訪問を行う。キャンプ中に聖和の OG 2 名が来島。	○
1983										水不足のため、中止 4 月に勉強会を実施	資料あり
1984	8/30 (木) ～ 9/3 (日)	西垣二一	西垣二一	志垣めぐみ	16名	聖和学 Y	聖和大学 神戸大学 OB		岡田誠太郎	ワーク作業として海岸堤防土砂慣らしと各所土慣らし、海岸清掃を行う。園長の講演を聞く。	○
1985			飯野敏明	藤永典子	14名	聖和学 Y	聖和大学 神戸大学 OB		岡田誠太郎		
1986	8/4 (月) ～ 8/7 (木)			早川香恵子	9名	聖和学 Y	聖和大学 別大付看専			祭りの準備と手伝い。盲人会との交流。病室訪問。塔和子さん詩集出版記念パーティー。「入所者の高齢化に伴い、ワーク中心から交流中心への訪問に移りつつある」(西垣先生、文集より)	
	9/25 (木) ～ 9/28 (日)		西垣二一	山本達士	10名	聖和学 Y	聖和大学		岡田誠太郎	ワーク作業として教会の草刈りと海岸掃除を行う。百寿会との交流会。家庭訪問。主日礼拝後に「相愛の道を武智高さんと歩く」というプログラムを実施。朝拝・夕拝・霊交会礼拝。園長の講演を聞く。	
1987	9/22 (水) ～ 9/25 (金)		西垣二一	山本達士	11名	聖和学 Y	聖和大学 別大付看専			ワーク作業として、教会の草刈りと雨どい清掃、海岸清掃、池の掃除を行う。雨天のため、予定していたワークの一部が中止となる。ゲートボール公式戦の観戦。百寿会との交流。朝拝・夕拝・霊交会礼拝。	○
1988	9/19 (月) ～ 9/22 (木)		西垣二一	武 俊彦	13名	聖和学 Y	聖和大学			家庭訪問。霊交会晩祷。病室訪問。	資料あり

年度	実施日	引率 / 参加顧問	チャプレン 礼拝説教者	学生リーダー / 実行委員長	参加人数	主催	所属団体	霊交会代表	講演	概要	文集有無
1989	9/11 (月) ~ 9/14 (木)		西垣二一	梶野敦子	17名	聖和学 Y			岡田誠太郎	ワーク作業として、教会の掃除を行った。海岸掃除は雨で中止。大島めぐり。家庭訪問 (自治会の方やカトリックの信者も訪ねた)。病室訪問。園長による講演。17名中9名が初参加者。職員との交流の時間も持て、有意義であった。赤澤・塔さん宅でビデオ「不明の花～塔和子の世界」を鑑賞した。青松園内の施設の改善が目につく。	○
1990	9/15 (土) ~ 9/18 (火)		西垣二一	染森義孝 豊田佳菜枝	32名	聖和学 Y	聖和大学 神戸大学		曾我野一美	過去最高の参加人数となる。初参加者が多く、1日目はオリエンテーションに時間を割く。2日目は霊交会礼拝。午後に曾我野一美さんの講演。夜に家庭訪問。3日目は雨天の為、野外ワークは中止とし、図書整理と盲人会との交流。その後、台風接近の為、予定を繰り上げて帰宅。	○
1991	8/29 (木) ~ 9/1 (日)	西垣二一		島津知代 明本智代		聖和大学 学生有志		曾我野一美	曾我野一美 金網史至	ワーク作業として、教会の屋根清掃、海岸清掃を行った。園長の講演を行う。各日夕食後に家庭訪問。最終日は霊交会礼拝。	○
1992				明本智代		聖和学 Y	聖和大学	曾我野一美	曾我野一美	午前の霊交会礼拝と、午後の家庭訪問、曾我野一美さんの講演を行い、高松教会に宿泊。2日目は大島には行かずに、琴平教会に宿泊。牧師も交えて大島訪問のシェアを行う。帰りに「かずら橋」を観光して帰る。	発行なし
1993		トーマス・ヘイスティング		大前信一		聖和学 Y	聖和大学	曾我野一美			発行なし
1994				大前信一		聖和学 Y	聖和大学	曾我野一美			発行なし
1995	9/3 (日)	青野正明	西垣二一	桃山龍太	7名	聖和学 Y	聖和大学	曾我野一美	西垣二一	夜行のジャンボフェリーで高松へ。礼拝後、西垣先生による大島ワークの歴史について聞き、屋根の松葉落とし等の作業を少し行ったが、台風接近のため予定を繰り上げて帰る。	発行なし
	11/19 (日)	—	西垣二一	桃山龍太	9名	聖和学 Y	聖和大学	曾我野一美		夜行のジャンボフェリーで高松へ。礼拝後、午後から家庭訪問を行う。	○
1996	9/1 (日)	青野正明	西垣二一	桃山龍太	23名	聖和学 Y	聖和大学	曾我野一美	曾我野一美	夜行のジャンボフェリーで高松へ。全員で大島散策を行った後、午後は曾我野一美さんの講演と家庭訪問。	○ (合併号)
	10/12 (土)	—	—	桃山龍太		聖和学 Y	聖和大学	曾我野一美		ワーク (礼拝堂の内部、屋根の掃除、芝生刈り) と島内散策。一部の参加者が夜の多度津教会伝道集会に出席。	
1997	9/7 (日)	—	西垣二一	桃山龍太	20名	聖和学 Y	聖和大学 早稲田大学	曾我野一美	中石俊雄	夜行のジャンボフェリーで高松へ。午後は中石俊雄さんの講演と家庭訪問。	○

年度	実施日	引率 / 参加顧問	チャプレン 礼拝説教者	学生リーダー / 実行委員長	参加人数	主催	所属団体	霊交会代表	講演	概要	文集有無
1998	9/4 (金) ~ 9/6 (日)	青野正明	西垣二一	石田原さやか	32名	聖和学 Y	聖和大学 岡山大学 京都大学 桃山学院大学	曾我野一美	西垣二一 東條康江	青木港夜中 0:30 発のジャンボフェリーが欠航となり、2:50 発で高松へ向かう。1 日目、礼拝堂周辺のワーク、西垣二一先生の講演。午後は海水浴や鳥散策など、各々自由に過ごす。この年より多度津教会での宿泊が開始。夜は賛美の練習。2 日目は霊交会礼拝。高田正久先生の奏楽。礼拝の最後に特別賛美し、その後、高田敦子さん（聖和学 Y シニア）に過去の大島訪問の話を簡単にさせていただく。午後は東條康江さんの講演で、信仰生活について話された。その後、家庭訪問。	○
1999	9/17 (金) ~ 9/19 (日)	—	西垣二一	門山路都	29名	聖和学 Y	聖和大学 鳥取大学 立命館大学	曾我野一美	曾我野一美 南部 剛	初日は多度津教会でハンセン病学び会。2 日目は曾我野一美さんの「発病から現在まで」の話を聞いたあと、午後は大島探索。夜は多度津教会で賛美の練習。3 日目は霊交会礼拝。高田正久先生に奏楽をお願いしていたが、「ヒムブレイヤーの方が慣れているので」と変更。昨晩に練習した賛美を捧げ、礼拝終了。西垣二一先生、山田敦子さん（大学事務局）、大前信一さん（聖和学 Y シニア）から過去の大島訪問の様子を簡単に話していただく。午後は南部剛さんの講演の後、家庭訪問。	○
2000	9/17 (日)	—	西垣二一	原江里奈	14名	聖和学 Y	聖和大学 京都大学	曾我野一美		霊交会礼拝は西垣二一先生の説教。	
2001	8/10 (金) ~ 8/12 (日)	岩坂二規		原江里奈	33名	聖和学 Y	聖和大学 同志社大学 立命館大学 京都大学 関西学院大学	曾我野一美	曾我野一美 西垣二一	初日は JR で多度津へ移動し、学び会。2 日目はワークの後、家庭訪問。3 日目は主日礼拝。志村牧師の説教。礼拝後に西垣二一先生よりワークキャンプ時代の話を聞く。午後は曾我野一美さんの講演の後、自由時間としたが、鳥散策、海岸や礼拝堂で休憩、家庭訪問する等、参加者それぞれに過ごした。	○
2002	8/2 (金) ~ 8/4 (日)	岩坂二規	西垣二一	高橋正哉	29名	聖和学 Y	聖和大学 鳥取大学 同志社大学 流通科学大学 関西学院大学 立命館大学 四国学院大学 大阪 Y 国際専門学校	曾我野一美	長尾榮治 曾我野一美	初日は JR で多度津へ移動し、学び会。2 日目は大島に渡り、午前ワーク。午後に長尾榮治園長の講演と家庭訪問。夜は多度津教会で賛美歌練習。3 日目は大島に渡り、霊交会礼拝。西垣二一先生が説教。午後は曾我野一美さんの講演の後、フリー。	○
2003	9/19 (金) ~ 9/21 (日)	岩坂二規		中野卓磨	30名	聖和学 Y	聖和大学 同志社大学 大阪 Y 国際専門学校 中央大学 大阪外国語大学 慶應義塾大学 四国学院大学	曾我野一美	長尾榮治 中西眞理子 大前信一	【テーマ】繋がる心の糸 「島内での宿泊」を青松園側と交渉してきたが、実現しなかった。初日は多度津教会でテーマ解題。2 日目は庵治第二小学校の吉田昂生君・丹生陽七海さん・北村嘉規君・北村佐知さんによる大島案内。午後は庵治第二小学校で桃山龍太さんが子どもたちに「ボランティアとは」という講義を行う。その後、中西眞理子校長から小学校の大島での取り組みを聞く。その後、長尾榮治園長の講演。3 日目は主日礼拝の後、大前信一さんから過去の訪問活動の話を聞く。	○

年度	実施日	引率 / 参加顧問	チャプレン 礼拝説教者	学生リーダー / 実行委員長	参加人数	主催	所属団体	霊交会代表	講演	概要	文集有無
2004	9/3 (金) ～ 9/5 (日)	岩坂二規		薄井一海	27名	聖和学 Y	聖和大学 大阪Y国際専門学校 慶應義塾大学 神戸大学 中央大学 同志社大学 同志社女子大学 鳥取大学	曾我野一美	長尾榮治 奥村 学 南部 剛	【テーマ】繋がる心の糸「伝える」 初日はJRで多度津へ移動し、 多度津教会で学び会と名刺作り。 2日目は大島に渡り、長 尾榮治園長の講演。小学校で 奥村学さんの講演。丹生陽七 海さんの大島案内で前日に作 った名刺の交換。3日目の霊 交会の礼拝は桃山龍太さんが 担当し、「繋がる心の糸」とい う題で証しを行った。午後は 南部剛さんの講演。その後、 家庭訪問。	○
2005	9/10 (土) ～ 9/12 (月)	岩坂二規	—	和田健太	25名	聖和学 Y	聖和大学 大阪Y国際専門学校 京都大学 関西学院大学	曾我野一美	西垣二一 脇林 潔 長尾榮治	【テーマ】絆 ～一期一会の出会い～ 日中のジャンボフェリーで高 松へ。多度津教会に向かい、 学び会と参加者交流会。2日 目は霊交会礼拝。長内敬一牧 師。礼拝後、西垣二一先生の 講演。午後は家庭訪問の後、 霊交会で脇林潔さんの講演。 多度津教会で名刺作り。3日 目は原田渡君・吉田昂生君・ 丹生陽七海さん・丹生恭太郎 君による大島案内。長尾榮治 園長による講演。帰日もジャン ボフェリーを使用。	○
2006	9/15 (金) ～ 9/17 (日)	岩坂二規	—	中田葉子	39名	聖和学 Y	聖和大学 宝塚造形芸術大学 中央大学 大阪Y国際専門学校 松山東雲短期大学	曾我野一美	西垣二一 東條康江	【テーマ】今 この瞬間 ～過去 から未来への一筋道～ 1日目はJRで高松へ。大島に 渡り、丹生陽七海さん・吉田 昂生君・丹生恭太郎君による 大島案内。多度津教会でハン セン病学び会。2日目は西垣 二一先生の講演。午後は東條 康江さんの講演。3日目は霊 交会礼拝。川崎正明牧師の説 教。礼拝の最後に曾我野一美 さんが「霊交会の代表を交代 したい」と言われる。午後は カレンダー作りと家庭訪問。	○
2007	9/15 (土) ～ 9/17 (月)	岩坂二規	西垣二一	神崎 優	43名	聖和学 Y	聖和大学 中央大学 大阪Y国際専門学校 関西学院大学	脇林 清	市原新一郎 山本隆久 丹生将一郎	【テーマ】五感で感じる、響き 合う 講演は市原新一郎副園長、大 島あんな。高松教会で宿泊 (1992年以来、2度目)。大島 青松園職員の丹生将一郎さん を囲む会。2日目は霊交会礼 拝に出席。西垣二一先生の説 教。自治会長の山本隆久さん の講演。	○
2008	10/11 (土) ～ 10/13 (月)	岩坂二規		上野法子	28名	聖和学 Y	聖和大学 大阪Y国際専門学校 中央大学	脇林 清	森 和男	【テーマ】出発点は自分 島内宿泊の復活。自治会長の 森和男さんの講演。2日目の 礼拝後に9/25に亡くなった 「芝清美さんを偲ぶ」プログ ラムを行う。3日目にかけて 霊交会所蔵図書整理ワークを 行う。	○
2009	8/28 (金) ～ 8/30 (日)	岩坂二規		金谷静香	28名	聖和学 Y	聖和大学 松山東雲短期大学 大阪Y国際専門学校	脇林 清	沢 知恵	【テーマ】あなたと一歩先へ… 2日目に大島会館で行われた 沢知恵さんの大島青松園コン サートの会場手伝いが中心と なり、その他に図書整理ワ ーク、本棚作り、海岸清掃を行う。	○

年度	実施日	引率 / 参加顧問	チャプレン 礼拝説教者	学生リーダー / 実行委員長	参加人数	主催	所属団体	霊交会代表	講演	概要	文集有無
2010	8/21 (土) ～ 8/23 (月)	岩坂二規		金谷静香	29名	聖和学 Y	聖和大学 関西学院大学 大阪Y国際専門学校 中央大学	脇林 清	西垣二一 山本隆久	【テーマ】「無」(塔和子さんの詩のタイトル) 1 日目は脇林清さんと島めぐりの後、学び会。2 日目は霊交会礼拝、西垣二一先生の講演、家庭訪問。3 日目は霊交会、霊交荘、海岸の清掃、図書ワーク、山本自治会長の講演。	○
2011	8/5 (金) ～ 8/7 (日)	岩坂二規		矢野綾都	12名	聖和学 Y	聖和大学 関西学院大学 中央大学	脇林 清	—	純粋に大島の方々と楽しい時間を共にし、利用者の方々と直接接する機会を持ち、感謝の気持ちを届けることを目的とする。オリエンテーリングでは療養所の歴史を学ぶ島内探検プログラムを実施。島の南東部の山に竹を取りに行き、そうめん流しや花火を行い、霊交会以外にも事務所、介護、介助スタッフと連携し、盲人会の方たちを初めて招いた。	○
2012	8/31 (金) ～ 9/2 (日)	岩坂二規		檜山あゆみ	25名	聖和学 Y	関西学院大学 中央大学 広島大学 清泉女子大学 大阪Y国際専門学校 米子Y専門学校	脇林 清	川崎正明 脇林 清	各自で高松駅に集合して大島に渡る。昼食後に学び会を行い、家庭訪問。2 日目は川崎正明先生を交えて塔和子さんの詩を読む会を行い、その後、川崎先生の講演会。夕涼み会の花火には霊交会や百寿会の方を中心に招待する。3 日目の霊交会礼拝後は、清掃を行う。	○
2013	8/16 (金) ～ 8/18 (日)	岩坂二規		花岡 南	20名	聖和学 Y	関西学院大学 中央大学 佛教大学 米子Y専門学校	脇林 清	—	各自で高松駅に集合して大島に渡る。学び会の後、家庭訪問(磯野さん、大西笑子さん、他不明)。2 日目、大島散策の後、午後に塔和子さんの詩の朗読会、夕涼み会で島内の方々と交流をする。3 日目は霊交会礼拝の後、ワーク作業として、霊交会・霊交荘・百寿会の清掃を行う。8/31 には塔和子さんの誕生日会を病棟で、9/1 には東條高さんの誕生日会を夕涼み会で行う。	○
2014	9/17 (水) ～ 9/19 (金)	岩坂二規		長田悠也	19名	聖和学 Y	関西学院大学 神戸女学院 京都大学 中央大学 佛教大学 米子Y専門学校	脇林 清	西垣二一	正式な「訪問プログラム」としては最後の年として実施。1 日目は学び会、大島散策、ハンセン病の聖書箇所のかち合い。2 日目はワーク作業として、霊交会の資料整理と清掃、大島の地図作り、大島会館に入所者を招いてお話を聞いた。3 日目は、西垣二一先生による講演、主日礼拝の代わりとして閉幕集会と聖書研究を実施。霊交会 100 周年を信徒の方と祝う為に賛美集会を行った。	○
2016	9/11 (日)	—	西垣二一	前田ゆたか 大前信一	46名	大島同窓会 発起人	過去の参加者 現役生	(東條高)	野村 宏	【テーマ】超世代 7/30 の大島同窓会の第2弾として実際に大島に足を運ぶ。礼拝説教は西垣二一先生。昼食を兼ねて懐かしい大島を各々散策する。午後は野村宏さんの講演の後、家庭訪問を行う。	発行なし

年度	実施日	引率/ 参加顧問	チャプレン 礼拝説教者	学生リーダー/ 実行委員長	参加人数	主催	所属団体	霊交会代表	講演	概要	文集有無
2018	8/18 (土) ～ 19 (日)	岩坂二規		松山和輝 松崎順平 田村隆行	18名	聖和学 Y	関西学院大学 京都大学 神戸女学院 九州大学	(東條高)		「2018 関西地区学 Y 夏期スタ ディツアー」として実施。大 島散策、家庭訪問、ハンセン 病学会、聖書研究会、交流 会を行い、二日目は直島に寄 り、帰る。	発行なし

(凡例)

表中略称を用いている (「Y」=YMCA、「学 Y」=学生 YMCA、「学 Y 神戸連」=神戸学生 YMCA 連盟、「神」=神戸大学、「聖」=聖和大学、「別大付看専」=別府大学附属看護専門学校)。また、それぞれの項目についての留意点は以下のとおり。
「引率・参加顧問」1990 年頃まではチャプレンが引率を兼ねていた。その後は顧問として参加しているが、学生のみで実施した年もあった。

「チャプレン・礼拝説教者」1990 年頃まではキャンプ全体のチャプレンを担っていたが、訪問プログラムに変更後は霊交会礼拝の説教担当として記載。

「主催」文集や記録集などに記載されている名称を記載。

「霊交会代表」途切れることなく代表はいるが、明確な引き継ぎ年の記録が確認できず、不明箇所は空欄としている。霊交会は 2014 年 11 月 11 日の創立 100 周年記念礼拝をもって対外的な活動を終了。

「概要」発行されている文集・記録集などを元に、編集委員がまとめたものである。

2014 年度をもっていったん大島訪問プログラムは終了。2016 年度の訪問は「超世代企画」で卒業生有志によって実施され、2018 年度は新たな体制でのプログラム実施を試行したものであり、本調査の対象にはしていない。

ティア行動が抑止と予防の役割を果たす可能性、そしてその中心にライフストーリーの持つ力が内在することが示唆されている。

『道』の I 部『「大島ワーク」前史』は、特別寄稿『「いもづる会」のこと』と証言「関西学院大学『長島ワーク』の始まりとその時代』によって、大島訪問プログラムのルーツともいえる若者のハンセン病療養所との出会いと繋がり証言となっている。

①「いもづる会」のこと

「いもづる会」は、現在も大島で毎年行われている「夏祭り」の前身である「いもづる祭り」(写真 3)を始めた関西を中心とする活動であったことは、これまでの調査の中で知られていた。しかしながら、後の聖和大学や神戸大学の学生 YMCA による訪問活動との関係の有無や、会の起こり、主体となったメンバーや所属等はわからなかった。それが 2018 年 4 月に霊交会信徒への聴き取りを行った際に、会を始めたメンバーの一人である西村潤の消息について聴くことができ、早速連絡をとって電話でのインタビューおよび『道』への原稿依頼という運びになったのである。

『「いもづる会」のこと』には、1960 年から始まっ



写真 3 「第 9 回いもづる祭 主催 いもづる会 後援 自治会」(1980 年頃)

た当時大阪の高校生だった 4 人の生徒たちと大島青松園との個人的で温かな繋がりと、その後継続発展したボランティア活動(「いもづる会」は 1962 年春に結成)の経緯が述べられている。最初の 4 人の高校生たちのうちの桃山学院高校に在籍していた 1 人が西村であり、高校 3 年生の時にハンセン病療養所職員による学校での講演会を聞いたことをきっかけに、翌年の夏に大島を訪問し 10 日間滞在したことが交流の始まりである。他

の3人は、「大阪女学院高校学Y⁹⁾」の活動で大島を訪れたことが発端となった経緯が明らかにされているものの、後の大学の学生YMCAによる大島訪問プログラムに直接の関係があったかどうかを確かめることはできなかった。ただ、その大阪女学院の生徒のうち2人は1962年に聖和女子短期大学（後の聖和大学）に進学しており、年代を考え合わせるとこの2人が第1回大島青松園ワークキャンプに関わった可能性もあるが、先述の通り第1回ワークキャンプの報告文集が見つかっていないため、定かではない。なお、この4人の繋がりには、西村と大阪女学院の生徒の1人が同じ教会（日本基督教団南住吉教会）に所属していたことを介しており、かれらのそれぞれの大島との出会いと体験の共有が、後の「いもづる会」結成に繋がった。

②関西学院大学「長島ワーク」の始まりとその時代

1960年に「第1回長島ワークキャンプ」に参加した長尾文雄に、当時の社会状況とワークキャンプの様子、また今その歴史に学ぶことの意味などについて、2時間近く聴き取りを行い、対話形式のインタビュー録とした。事前調査によって¹⁰⁾

大島青松園でのワークキャンプを呼びかけた播磨醇（光明園家族教会／当時）がそれ以前から赴任先の邑久光明園において学生と入園者によるワークキャンプを実施していたこと、それが「大島ワーク」のモデルとなったことがわかっていた。

長尾もまた、関西学院大学のSCA（学生YMCAのこと¹¹⁾）の活動によってハンセン病療養所と出会っている。当時の日米安保闘争前後の大学キャンパスの雰囲気と1960年の夏という学生運動の潮目の時機、そしてその中で長島へ向かう学生の動機や切迫感などが語られた。そこからは、「長島ワーク」が指導者の呼びかけに応じて参加した結果始まったといった単純なものではなく、参加者それぞれに複雑な事情や思いを抱えながら、自分自身の生き方を真摯に抱えて厳しいワークに汗を流し、入園者との交わりによって社会と自分自身の中にある差別と偏見、信仰と倫理観に向き合ったことが窺われた。

この対話は、ハンセン病療養所訪問という若者のボランティア行動が、プログラム参加経験者に及ぼす影響の広さと深さを豊かに伝えるものである。それは、長尾自身のライフコースの語りと、対人援助者養成をライフワークとしながら、

9 ここには「学Y」とあるが、当時全国の公立私立の高校にクラブ・サークル活動として組織されていたYMCA・YWCAの名称は「ハイスクールYMCA／YWCA」であった。大阪女学院は女子高であることから、ここでの「学Y」とはハイスクールYWCAのことであろう。大阪女学院中学校高校のハイスクールYWCAは、現在もクラブとして活動を続けている。

10 西垣二一（元聖和大学学生YMCA顧問、元聖和大学学長）の証言に基づいて、2017年10月に播磨醇（元日本基督教団光明園家族教会牧師）への聴き取りを行った。

11 関西学院大学学生YMCA（SCA）については、『道』の長尾文雄（元社団法人好善社理事）との対話文の中の注釈において、「関西学院宗教総部とSCAについて」として『関西学院事典 増補改訂版』（2014）の説明を付している。ここでも以下に同じものを引用しておく。「宗教総部の創立は、関西学院創立直後に組織された基督教青年会の活動にさかのぼる。大学としての活動は、学生YMCA、同YWCAの全国組織あるいは世界学生キリスト教運動（SCM）に呼応して、両者を包括する公称をSCA（Student Christian Association）と改め、聖書やキリスト教思想の研究活動をも重視する学内において、学生会の一翼を担う宗教総部を1952年に構成したことに始まる。（中略）1957年以降、宗教総部は宗教活動委員会から独立する方向をとり、大学紛争時まではその傘下にキャンプリダーの会、長島ワークキャンプグループ、キリスト者反戦連合、献血運動実行委員会などが加わっていた。68年に大学紛争で活動を停止し、69年にはSCAを廃し、奉仕部、千刈リーダーズクラブ、聖書研究会を下部組織とする宗教総部となり、70年以降各部が活動を始め、現在に至っている。」

ハンセン病療養所との関わりと交流を公私にわたって長年続けた経験から導かれる「いのちの尊厳」への語りとが呼応する複合的な文脈で捉えられるものであり、本稿の考察の核心を導くものとなった。

③若者たちの軌跡：報告文集からの再話と物語を繋ぐコラム



写真4 道路舗装作業 (1969年)



写真5 盲導柵ペンキ塗り (1980年頃)

Ⅱ部「若者たちの軌跡」は大島訪問プログラムの歴史を年代ごとに7期に分け、それぞれの時代で残されている報告文集から、当時の参加者の感想文を再掲するとともに、各期に共通する話題、時代状況と空気感のようなものを「コラム」によって伝えている。「コラム」は編集委員が参加当事

者だった年代に近い時期を担当し、これまでの調査で明らかになったことを合せて各期を繋ぐことを意図しながら執筆した。

50年間継続したと言っても、原則4年で卒業していく大学生主体の活動は、縦の繋がりが弱く、方法やメッセージを継承していくことに制約がある。報告文集で記録されたプログラムの内容および方法と、そこに著された感想文に込められたメッセージは、時代を超えてこの活動を継続させるのに十分な物語性を生む。『道』においても、「コラム」の文章によって年代ごとの個々の語りに縦串が入れられ、50年を貫く「大島という物語」が立ち上がる。それによって、各期で数篇ずつ抽出された感想文が、単なる過去の文章の再掲文ではなく、全体の文脈と物語の流れにおける役割を負った「語り直し」の意味をもつ「再話」となるのである。

プログラム参加者が終了後早い時期に記述する感想の傾向について、筆者は前掲「研究ノート」においてその内容に共通する要素を抽出し、要約した。

「最初は長年の不自由な暮らしや過去の被差別経験から、もっと重く苦しい、あるいは厳しい言葉や態度が自分たちに向けられると予想していたが、接してみると本当にそんな辛い経験をされたのかというほどに明るく前向きで、感謝の言葉や態度さえ表された」ことに驚き、「どうしてそんなふうになれるんだろう」という疑問や不思議さ、また「自分自身の知識、認識の不足」と「社会のあり方、政治経済的な構造の不合理や不公正」への気づき・反省と怒り、そして「自分自身が抱えている問題や悩みに向き合えた、あるいは解決のヒントをもらった」という自己実現感、といったもの¹²

『道』の「あとがきにかえて」でも述べたが、

12 岩坂前掲書 (2015) p.37

このような個々の語りを全体の傾向として特徴づけ、抽出して再構成し、短い一文にすることには、個々の参加者のもつストーリー性や表現の多様性を、限定された意図や目的によって侵したり排除したりする可能性があるという点で、限界があるだろう。一方で、分析し、要約する者の背景、動機、意図を開示したうえで全体の傾向や要約がなされたものは、その者のライフストーリーにおける語りという意味で再構成され集積された他者のストーリーの再話となりうるのかもしれない。

④交わりの証し：受け入れるものの語り

2018年4月に大島青松園内で実施した、霊交会信徒の脇林清と東條高からの聴き取りを、長年に渡って多くの若者を受け入れ、共にプログラムをつくった側からの語りと捉え、Ⅲ部「交わりの証し」として対話録にしている。2人とも17歳で青松園に入所し、70年以上を療養所で暮らしてきた。前述したとおり、今回の調査の折に「いもづる会」創設者の一人である西村を紹介したのは東條であり、1960年に初めて大島にやってきた西村ら高校生を受け入れ、その後も交流が続いている。2015年2月に急逝した妻康江とともに、いつも変わらぬ明るく優しい笑顔で、自ら育てた果物と野菜、手製の菓子などで、訪れた学生や卒業生をもてなし、音楽CDを製作するほどの美しい歌声を聴かせている。若い頃には社会復帰を志し、電気技師を目指して東京に出たこともある脇林は、その後大島に戻って「島の電気屋さん」を自任し、入園者の居宅の電気工事などを請け負ってきた。趣味のカメラで大島の四季といのちを撮り続け、その自然観、人生観を紡いだことばを写真に添えて、展覧会を催し、写真集も発行している。

2人の語りには、多くの訪問者が、一般的な、あるいは自分の中のハンセン病者のイメージと、実際に島を訪れて出会った入園者のイメージとの間のギャップに戸惑い、そういった先入観やものの見方を変えられる体験の理由を解き明かすようなメッセージが含まれている。さらに、外部から大島を訪れるものだけでなく、彼らを受け入れる

側もまた、「大島ワーク」をともに生き、その出会いと交わりによって自分のライフコースに影響を受けたことが語られているのである。

⑤「大島ワーク」後を生きて：訪うもののライフコース

2016年から約1年半に渡って50周年記念誌への投稿を呼びかけた結果、33名の原稿が集まった。内訳を『道』Ⅱ部の時期区分により卒業年で分類すると、1期（1965-1971）が3名、2期（1972-1979）が1名、3期（1980-1985）が8名、5期（1990-1994）が2名、6期（1995-2005）が4名、7期（2006-2014）が9名、その他が3名（参加者の家族2名、プログラム終了後の2018年参加者1名）である。第4期（1986-1989）は寄稿がなかった。時期によって寄稿に偏りがあるのは、『道』編集委員の中に3期に該当する卒業生が3人いることや、聖和大学学生YMCAが、全国の



写真6 霊交会礼拝堂での礼拝（1960年代か）



写真7 霊交会礼拝堂での礼拝（1980）

学生 YMCA と同様に学生運動後のキャンパスの荒廃の中で、1970 年頃から数年間活動を休止したことなどによる。

個々の寄稿において、その多くが学生当時の社会や個人的な状況を振り返るとともに、大島訪問プログラムでの経験を記憶や報告文集などをもとに記録に留めようとしている。そして、そのような大島の原体験を相対的に見つめ直し、その後のあるいは今の自分の生き方や仕事にどのように関わったかを考えようとする記述も見られる。これらはまさにプログラム参加者の「語り直し」であり、ライフストーリーとしての再話の営みの一つとも言えるだろう。

⑥公開研究会「大島ワークの 50 年」からの語り：

ライフストーリー研究の視座

2019 年 3 月 9 日、『道』の刊行に合わせて「人権教育研究室 2018 年度共同研究公開研究会『大島ワークの 50 年』からの語り — 学生 YMCA ハンセン病療養所訪問交流の社会的意義を考える」を関西学院大学吉岡記念館において開催した。ここでは共同研究の成果報告とともに、基調講演（「語りのちから — ハンセン病ライフストーリー調査の経験から」 蘭由岐子追手門学院大学教授）と研究会参加者とともに考えるトークセッションが行われた。

一連の共同研究計画の総括でもあったこの研究会は、改めて本研究の「問い」を問い直し、半世紀にわたって織り成されたハンセン病者と学生・卒業生との交流の社会的また教育的な意義にどのようにアプローチするか、今後の研究の課題と可能性に「ライフストーリー研究」「語り（ナラティブ）による研究」という貴重な示唆が与えられる機会となった。

また、トークセッションでは、関西学院大学宗

教総部の学生が現在も継続している「呂久光明園訪問プログラム」について、また、同聖和キャンパス学生 YMCA の学生が 2018 年の夏に「関西地区学 Y 夏期スタディツアー」として実施した大島青松園訪問について、それぞれ報告を行った。このことの意味は大きい。現在も、現役の学生によってハンセン病療養所訪問プログラムが主体的に取り組まれていることは、この交流が「過去の語り」に自己完結するものではなく、今と未来に開かれた経験知であることを参加者に実感させたのである。

4. 考察

大島訪問プログラムをケーススタディとする社会的なボランティア行動に、人権が守られる社会づくりのためにどのような有意性と意義が見出されるのか、ということが、本研究の問いであった。それは「なぜ大島に向かうのか」という 50 年間変わらぬ若者たちの問いに置き換えることもできる。「なぜ大島に向かうのか」という問いは、若者を取り巻く時代の状況と社会の動向によって相対化されるものであり、今回の調査結果からもこの問いへの答えが一つではないことが明らかである。だが同時に、そのように相対的な「大島を訪う」ことの理由として、通底する何か、あるいは集約され辿りつく何かが確かにある。その「何か」を、長尾は「人間としての生き方」「人としての尊厳」の学びと捉えている¹³。それは、ハンセン病者が社会的に排除され隔絶された生の中で、いのちの尊厳と生きがい「を」掴み取っていった、選んでいった（長尾）姿と、その語りとの出会いと交わりによって生じる¹⁴。そのような出会いと交わりの織り成しこそが、演繹的に証された「大

13 『道』 p.12

14 長尾は、そのようなハンセン病者の生き様について、近著の中で「自己実現によるエンパワメント」の営みであることを指摘している（長尾（2019）『覚えて祈る — 長島と私の六〇年』pp.241-244 を参照）。さらに長尾は、精神科医の神谷美恵子がこのような見方を 1960 年代から示していたことを、『道』の対話録の中で示した。神谷は「... さまざまの文芸活動や絵画もさかんで、... 名手も少なくない。... こういう人たちの誇りにみちた、はりのある顔をみていると、たしかに時間というものは、つぶすこともできれば、活かすこともできるものだ、と思わせられる。」「苦しみの中から立ち上がり、苦しみを建設的なものに転換させる力が、人間の心には宿っていることを彼らは確認させてくれる。」と述べている（神谷（1971）『人間をみつめて』 p.170）。

島ワーク」の本質であり、その経験は「人権がもらえる社会をつくるはずだ」という目的への信念に帰納され、見えない力となって半世紀のボタンを手渡したのではないか。それは人間の尊厳の work としての長島／大島「ワーク」を経た一人ひとりの生き様であり、「ストーリー」と言い換えても良いものであろう。記念誌『道』のために「あの時」の自分と大島に向き合い、筆を執り、口を開いた一つひとつの表現は、語りなおされ再話され、「大島」という物語とともに生きようとする、これからの work となる。

ここで「ともに」と述べるのは、上述の長尾の言葉に表れているとおり、大島ワークの50年の中で入園者もまた、この交わりを彼ら自身の生の中に息づかせ、能動的にその関係づくりを選んできたからである。脇林は、「自分の人生を代わってくれる人は誰もいない。そうなのであれば、自分の人生は自分で切り開くべきだ」と、自然体で自律的に生きる個人としての人間観をベースに、「皆さん方がずっと継続して訪ねて来られる過程で、人間関係が徐々に広がってきたことを感じられるようになりました。」と、自らの若者との交流の意味を語った¹⁵。東條もまた、「いもづる会」やその後の学生YMCAとの交流を「学生が来るようになってから療養所の雰囲気も変わってきたよ。最初は距離を置いていたけれども、ふれあいが増えて良くなってきた。こっちも怖かったけど、それも無くなったし。」と、この交わりが開いたものをふりかえっている¹⁶。島外から来る若者と入園者は、互いに訪（問）い訪（問）われる者であり、それぞれにとっての生の意味をそこに見出し、掴もうとする work を共に働いた。その人生のワークは、大島キリスト教霊交会の、そ

して学生キリスト者運動に連なる学生YMCAの活動として、祈られ、讃美され、奉げられた信仰的な土台のうえで取り組まれたものであった¹⁷。

前掲の神谷（1971）は、精神科医として勤務していたハンセン病療養所のある入園者が、独学でフランス語を習得していることを知り、しかもそれが地位や業績のためではないことを思い、次のように述べる。

要するに金や報酬や名誉の問題ではないのだ。自分のいのちを注ぎ出して、何かをつくりあげること。自分より永続するものと自分とを交換すること。あのサン・テグジュペリの遺著『城砦』にある美しい「交換」^{エシヤンジュ}の思想を、この人はおそらく自分では知らず知らずのうちに、実行しているのだ¹⁸。

ここで述べられる「永続するもの」、つまり神の存在が強く意識された仕事—work が、自分と引き換えられるということ、そのようなまさに「いのちの尊厳」に根差したワークが、近代的人間社会が排除し、否定したハンセン病者に出会い直し、その交わりによって互いに人間性を恢復していく関係性をつくるものであることを物語る。

「大島ワーク」が参加者それぞれの生の文脈によって相対化されるストーリーであるならば、共に働いた人びとの声と今後も出会い、読み解いていくことに意味がある。何より、一人ひとりの生きる人生のコンテクストを尊重し、それに触れていくことでしか、ほんとうの「大島という物語」のもつ力が引き出されることはないだろう。私たちは、ハンセン病を生きたいのちの場所を訪れ、その出会いと交わりを自分の生にとりこんでいる

15 『道』 p.43

16 同書 p.48

17 同書 pp.95-99 「あとがきにかえて」 一部引用。

18 神谷前掲書 p.170

「いのち」の一人として、ともにその物語を生きる存在なのである¹⁹。

日本の近代化が加速した高度成長期に端を発する水俣病問題を、文明の病として文学世界に描いたことで知られる石牟礼道子の新作『不知火』は、水俣でいのちを断たれた死者たちの復活の物語である。水俣病公式確認から50年を経た年に編まれた本の中で、花崎（2007）は、『不知火』が「霊性による生命のとらえ方に満ちて」いることを指摘した。また、石牟礼の『苦海浄土』の中の1章をもとに一人芝居として創作された『天の魚』においては、「今の世の中ではない世」つまり「オルタナティブな世界」という意味をもつ水俣のことは「じゃなかしゃば」が象徴的に使われ、劇中歌にもなっていること、その歌が1989年に「水俣宣言」を発した世界先住民族会議の参加者によって歌われ、海外にも広まったことを紹介している²⁰。スピリチュアリティを遠ざけ、いのちの尊厳の物語に聴くことを忘れた近現代世界を生きる私たちは、その近代化が生み落とし、周縁化した「病」を生きる人々に出会うとき、霊性によって結びつけられ、聞えなくなった物語が聞えるようになり、人間であることを取り戻す「道」に招かれるのである。その「道」を歩み始めるに至って、私たちは「現代の社会的なボランティア行動は、人権をまもる社会づくりのために有意である」ことを、スピリチュアルで美しい言葉で表現できるようになるであろう。

おわりに

学生 YMCA 大島訪問プログラムに参加し、大

島青松園を訪れた学生は、確認された報告文集から明らかになった参加者数だけで、延べ915名になる。また、「大島ワークキャンプ」の前史である「長島ワークキャンプ」をはじめ、全国のハンセン病療養所への多くの学生による訪問プログラムを合わせると、それは何万人という経験の集積になることであろう。その一つひとつ、一人ひとりに、今回調査対象となった報告文集にあるような、あるいはそこには掲載されない背景や事情、動機や思い、またその経験に影響されたその後の生き様がある。そして、かれらと時と場を共に過ごし、働き、語らった入園者や、プログラムをサポートした人々の、数えきれないほどの物語がある。

本研究は、時間と時代の移ろいに埋もれていくそのような物語の歴史を記録にとどめることを一つの目的としたが、限られた資源の中で50年間のプログラムの記録を辿り、今しかできない聴き取りをし、50年記念誌という形にまとめたことによって、一定の成果があったといえるだろう。しかしながら、その間にも当時の事情に通じた何人かの方がこの世を去り、様々な意味で「間に合わなかった」とも言える。

だが同時に、この作業を通して多くの卒業生が多忙な日々の中で時間をつくり出して原稿を書き、記憶と記録を提供してくださった。また、初期のプログラムに関わった当時の指導者や協力者の方たちが、高齢にも関わらず献身的にこのプロジェクトを支援し、協力を惜しまれなかった。おそらくそのすべてが、「大島ワークの50年」を証することが、自己実現や自己承認の欲求の枠をはるかに超えて、普遍的ないのちの尊厳と人権がま

19 本研究は、手法としての「ライフストーリー研究」によってよりの確な深まりと進展を展望できるであろう。前掲「研究ノート」（2015）において本稿の研究課題の契機となった「語り」の聴き取りへの着目は、蘭（2004）らによる医療人類学や社会学におけるライフヒストリー研究の手法、また西尾（2014）による「語り」からの表象の捉え方に示唆を得たものである。本稿で提示した研究の成果が示す今後の課題として、現代社会における人間性の回復および人権保障が、物語性と霊性の関連の中で論じ探究されることの重要性が明らかになった。ライフストーリー研究については、桜井（2012）『ライフストーリー論』を参照。

20 花崎皋平「水俣からピープルの思想へ」 最首・丹波（編）『水俣50年—ひろがる水俣の思い』 pp.246-247

もられる社会の実現に確かに繋がっていくという信念と、それと引き換えるスピリチュアリティに根差した信仰によるものだったであろう。ここに一人ずつのお名前は記さず、心からの謝意と敬意を示したい。

参考文献

「大島ワーク」50年記念誌編集委員会 『道—学生YMCA「大島ワーク」の50年—』 関西学院大学生協同組合書籍部、2019年

西野雄志 『ハンセン病の「脱」神話化』 皓星社、2014年

岩坂二規 「人権研究におけるボランティア行動の意義と評価—学生YMCAによるハンセン病療養所訪問プログラムをもとに—」『関西学院大学 人権研究』第19号、2015年

蘭由岐子 『「病いの経験」を聞き取る』 皓星者、2004年

蘭由岐子 「社会学における研究実践について」ハンセン病市民学会（編）『ハンセン病市民学会年報2013 いま、「いのち」の意味を問う』 解放出版社、2014年

長尾文雄 『覚えて祈る—長島と私の六〇年』 編集工房ノア、2019年

神谷美恵子 『人間をみつめて』 朝日新聞社、1971年

桜井厚 『ライフストーリー論』 弘文堂、2012年

花崎皋平 「水俣からビートルの思想へ」 最首悟・丹波博紀（編）『水俣50年—ひろがる水俣の思い』 作品社、2007年